草の芽句会だより

NO,165
22 5,5

夏野菜の苗届きたり露光る　純子
赤白の鉄塔聳ゆ夏の空

城濠の風にすいすい鯉幟　貞子
マスクして立夏の城を上りゆく

若楓詠みたる友は健やかか　範子
吟行の気温上昇夏帽子

城まつり終りて一気にくる薄暑　禮子
お祭りの後始末する城若葉

囀りの高き梢に心寄せ　剋子
静けさに風の渡れる菖蒲池

大伽藍楠新緑の大樹かな　文子
ぼうたんの開くも散るも華やかに

軒くぐる声さわがしき朝燕　節子
雨に散る薔薇の花びら赤きまま

我が狭庭夏の緑に包まれし　芳子
み仏の山に囲まれ夏に入る

出席者　馬場　吉崎　川原　森　小山
投句者　大黒　氏家　小林

城山は輝くような若葉である。お濠を跨いで鯉のぼりが泳ぐ。大手門を潜ると爽やかな新樹の香りに包まれる。澄み切った空気に自然と足どりも軽い。見返り坂は溢れる程の人出である。「桜もいいけど若葉のお城もええなあ」「なんだか若返った気がするわ」今日は「子供の日」。幼な子をおんぶした家族連れの姿を見ていたら、その昔、我が子の手を引き城山を上った日の事を思い出した。振り返れば、もう五十年も前のことである。

お城まつりが終り、うるし林には後片づけの器材を積んだトラックが並び、作業員の人達が忙しそうに立ち働いている。「天気がよかった。ええお祭りやったわ」ねじり鉢巻のおじさん達の声が聞こえる。　一大イベントを終えた城山に、今年も夏がくる。